

# 資料館だより

第 9 号

昭和63年 3月15日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市本町5-25-1 TEL0425(60)6620



写真1 原山の馬頭観音

# 武蔵村山市の馬頭観音

## 1. はじめに

武蔵村山市には数多くの石仏が残されており、道端こうしんとうに庚申塔ぼとうかんのんや馬頭観音じぞうそん（塔）、地藏尊などを見かけることがある。普段、何気なく見過ごしている石仏1つ1つを改めて見直してみると、造立された年月日や願いの文、造立した人の名前などが刻まれている。それらに気付いた時、道端に静かにたたずんでいる石仏に人間の息吹きを強く感ずるものである。

既に資料館では館報第2号から第6号の誌上におい

て市内の庚申塔について紹介したが、引き続き今号より市内の馬頭観音（塔）の紹介を行なう。これによって、ひとりでも多くの方々に馬頭観音（塔）の造立された意味を考えていただき、石仏ひいては文化財に対する理解を深めていただければ幸いである。

なお、今回の馬頭観音（塔）の紹介にあたって、武蔵村山市郷土の会発行の「武蔵村山市の馬頭観世音」を参考とさせていただいたことを付記しておく。

## 2. 馬頭観音について

馬頭観音の正式な名称は馬頭観世音菩薩かんぜおんぼさつと言ひ、「馬のごとく大口を開いて人々を救済し、馬が野の草を食べるとく余念なく、しかも疾走するとく迅速に人々を救う」という功德くどくをもつとされている。その姿は頭上に馬の顔（馬頭）を載せ、忿怒みんぬの相を示し、一面二臂にひ（顔が一面で腕が二本）あるいは三面八臂はつひである。聖観音しょうくわんや如意輪観音にょいりんなどとともに六観音に数えられている。

既に、この馬頭観音が平安時代や室町時代に石仏として刻まれているが、それらはいずれも馬頭観音どくの独尊どくそんではなく、複数の観音像とともに刻まれており、仏教的色彩が強いものである。これに対して、馬の守り本尊として馬頭観音が石仏に刻まれるようになるのは江戸時代中期以降である。庶民の信仰の中で、馬頭観

音が馬の供養くようや無病息災むびょうそくさいの祈願きがんの対象となっていた理由には、頭上に馬を載せていることやその名称に由来することなどが考えられる。江戸時代中期以降、馬頭観音（塔）の造立は盛んになり、ほぼ全国的な広がりを見せる。この背景には街道や宿駅の整備、物資の流通制度の確立により馬の果たす役割が広がり、庶民の中に馬を飼う者が増えたことがあげられる。

馬頭観音（塔）には馬頭観音の像を刻んだ像塔と「馬頭観世音」、「馬頭観世音菩薩」などと文字を刻んだ文字塔とがあり、両者を合せもつものもある。一般的に見て、個人の馬持ちにより造立されたものは小型の文字塔が多く、馬持ち講などの集団によって造立されたものは像塔ないしは文字塔であっても大型のものが多くなる傾向がある。

## 3. 武蔵村山市の馬頭観音

現在までのところ、武蔵村山市内には24基の馬頭観音が確認されているが、そのうち3基は行方不明になってしまい、その姿を見ることができなくなりました。しかし幸い、2基については昭和43年発行の村山町史に銘文等が記録されており、造立年代を知ることができる。残る1基については村山町史にも「原形不明」と記されており、当時既に台座だけ残して紛失していたと思われる。

これら24基の造立されている場所をみると、個人の屋敷内、堂前、旧街道沿い、山中などがあげられる。造立箇所が移動しているものについては本来の位置で

見たわけであるが、数量的には圧倒的に旧街道沿いに建てられたものが多い。交通、運輸の手段である馬の供養や無病息災を祈願することは街道往来の安全を祈願することでもある。また、旧街道沿いに建てられているものには街道の分岐点に建てられ、道標としての役割をもつものもみられる。山中では通称「捨て場」に造立されていたものがあり、死馬の供養が目的であったと思われる。

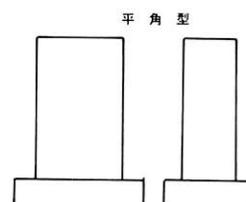
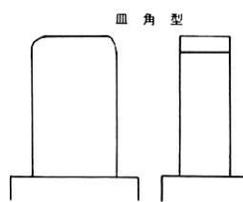
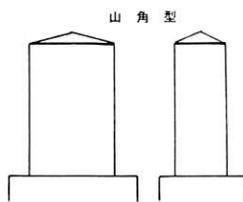
次に造立年代については、明確なものが20基あり、安永7年（1778年）を最古に、昭和3年（1928年）のものまでみられる。この間の150年を10年ごとに区切り

造立数の推移をみると初期の30年間に8基が造立されており、集中する傾向がみられるものの全体的には明治時代初期までは安定して造立されていて、10年間にほぼ1基ないしは2基の割合である。

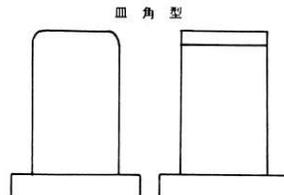
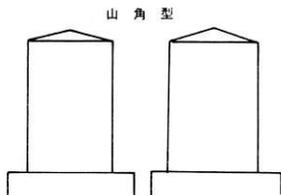
形態については第1図に示したとおり、ほぼ3種類で平柱状（正面の幅に対して奥行きが $\frac{1}{2} \sim \frac{2}{3}$ の割合のもの）、角柱状（正面の幅と奥行きがほぼ同じもの）、自然石がある。さらに頂部の形にも変化がみられ、山角型、皿角型、平角型に分けられる。

主尊（馬頭観音）の表現は全て文字によるものであり、そのうち3基には像も一緒に彫刻されている。また、「馬頭観世音菩薩」の文字の上

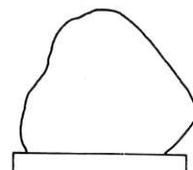
### 1. 平柱状



### 2. 角柱状



### 3. 自然石



第1図 武蔵村山市内の馬頭観音の形態

に馬頭が刻まれているものが1基ある。

以上が市内の馬頭観音についての概要であるが、次にその1つ1つについて紹介する。

## 原山の馬頭観音（写真1 分布図No.18）

現在は原山地域運動場北側の辻に寛保元年（1741年）の庚申塔と並んで建てられているが、本来は御伊勢の森神明社東側の引又街道沿いの辻に建てられていた。高さは123cm、正面の幅43cm、奥行き24cmで、頂部が皿角型を呈する平柱状のものである。

正面上半に一面二臂の合掌する馬頭観音の立像が浮き彫りされており、下半に「馬頭観世音菩薩」の文字

が刻まれている。右側面に「寛政五癸丑（1793年）十一月吉日」と刻み、左側面には一部判読できないが、「武州たま郡原山村講中願主 □ 左エ門」と刻まれている。

市内では唯一の馬頭観音の立像が彫られているもので、彫りも深く保存状態も非常に良い。

## 岸・猿久保の馬頭観音（写真2 分布図No.1）

岸の猿久保の山中にひっそりと建てられている。この場所は元、「捨て場」と呼ばれていた所であり、ここに死馬を埋葬した者がその供養のために造立したものと思われる。高さ84cm、正面の幅27cm、奥行き16cmで、頂部が皿角型を呈する平柱状のものである。

正面には「馬頭観世音」の文字が彫りこまれている。

右側面には「天保六未年（1835年）九月吉日」と造立年月日が刻まれ、左側面には「願主荒畑八郎兵衛」と造立者の姓名が刻まれている。

大切にしていた馬が死に、哀惜の念を込めた墓標的な意味合いも持つものと思われる。

## 岸・交差点南の馬頭観音（写真3 分布図No.2）

岸の交差点南側の改修以前の青梅街道沿いに庚申塔と並んで建てられている。高さ168cm、正面の幅42cm、奥行き36cmで、頂部が平角型を呈する角柱状のものである。

正面に「馬頭観世音菩薩」の文字が大きく刻まれて

いる。右側面には「時文化四年（1807年）丁卯二月吉辰」と刻まれ、左側面に「武州多摩郡岸村」と刻まれている。台座右側面に「南八王子大山道」と彫られ、道標も兼ねている。

隣の庚申塔と同時に岸村中で造立されている。



写真2 岸・猿久保の馬頭観音

願主 荒畑 八郎 兵衛  
天保六未年九月吉日

正面



写真3 岸・交差点南の馬頭観音

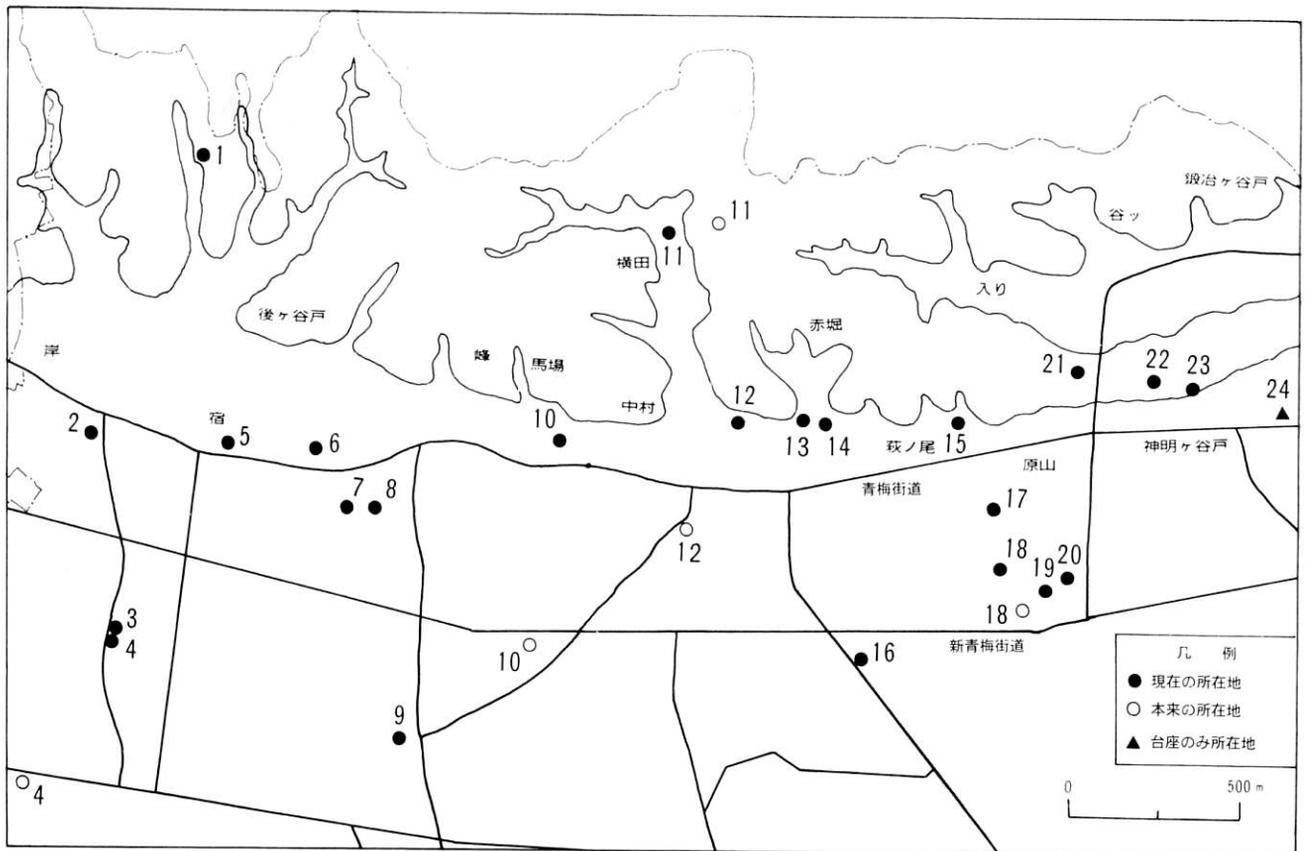
武州多摩郡岸村  
時文化四年丁卯二月吉辰

左側面

右側面

年号	分類	塔形	番分布号	備考
安永七年(七七八)	文字塔	平柱状	9	
天明六年(七八六)	文字・像	平柱状	11	座
寛政五年(七五三)	文字・像	平柱状	12	立像
寛政六年(七五九)	文字塔	角柱状	18	頭頂部に馬像
寛政六年(七五九)	文字塔	平柱状	5	
享和元年(八〇〇)	文字塔	平柱状	10	
文化四年(八〇七)	文字塔	平柱状	21	道標
文化四年(八〇七)	文字塔	角柱状	2	道標
文化八年(八二二)	文字・像	平柱状	20	座像
文政四年(八二二)	文字塔	平柱状	19	紛失
天保六年(八三五)	文字塔	平柱状	1	
天保十一年(八四〇)	文字塔	平柱状	16	紛失
天保十三年(八四二)	文字塔	平柱状	3	道標
天保十二年(八四一)	文字塔	平柱状	22	
文久三年(八六三)	文字塔	平柱状	13	
慶応四年(八六八)	文字塔	平柱状	8	
明治四年(八七二)	文字塔	平柱状	4	道標
明治八年(八八五)	文字塔	自然石	15	
明治二年(九〇九)	文字塔	平柱状	6	
昭和三年(九一八)	文字塔	平柱状	17	磨滅のため銘文不明
	文字塔	平柱状	23	
	文字塔	平柱状	7	
	文字塔	平柱状	14	残台座の存み
	文字塔	平柱状	24	

第1表 武蔵村山市の馬頭観音



第2図 武蔵村山市の馬頭観音分布図

# 写真で見ると

# 今と昔

# 写真展から

資料館では、昭和58年6月から市報や社会教育だよりの紙面を利用して、広く市民の所有する写真の提供をお願いしております。

この結果、現在まで359点に及ぶ貴重な写真資料の提供をいただきました。これらの写真の中から市内の風景を撮影したものについて整理し、昨年12月「武蔵村山市の今昔ー市内の風景の移り変りー」と題して写真展を実施しました。その中から昔の様子がよくうかがえる4枚の写真を紹介します。

## ——写真の解説——

### 写真1

昭和46年頃に撮影された写真で、東大和市側から見た村山団地の遠景です。周囲はほとんど畑でした。

### 写真2

昭和40年頃に撮影された写真で、御伊勢の森神明社南側を通る引又街道沿いの風景です。

### 写真3

昭和40年頃に撮影された写真で、引又街道沿いにそびえる三本榎を3本一緒に見ることができます。

### 写真4

昭和30年代に撮影された写真で、雑木林に覆われた伊奈平地区の風景です。かつての武蔵野がしのばれます。



写真1 村山団地遠景



写真2 御伊勢の森神明社付近の風景



写真3 三本榎の風景



写真4 伊奈平周辺の風景

## 古代史コーナー「古墳時代の生活用具」

昭和58年7月、市内の小学生2人が土器を2つ抱えて来館した。話によると、野山北公園運動場北側の山林内にある切通し部の崖面に顔を出していた土器を引き抜いたところ、その奥に大きな土器を見つけたため、まわりの土を崩して取り出したとのことであった。土器は綺麗に土が洗い流されていて、丹念に接着剤で接合してあった。先生に指導を受けながら2人で接合したとのことであった。よく頑張ったものだと感心させられた。

この2つの土器(写真1)は、1つが甗(こしき)、もう1つが甕(かめ)と呼ばれている古墳時代後半の土器で、考古学の時代区分からすると鬼高期(6~7世紀)に属する。古墳時代とは、大王や豪族たちが土を盛りあげて古墳と呼ばれる墓を造った時代のこと、その中の鬼高期は飛鳥時代とも呼ばれ、仏教伝来や遣隋使・遣唐使の派遣、中大兄皇子等による大化の改新のあった時代である。

武蔵村山市内の古墳時代の遺跡は13ヶ所で、中でも滝ノ入遺跡と吉祥山遺跡が有名である。滝ノ入遺跡は、昭和40年、心経院のお堂を造る際、鬼高期の住居跡が1軒発見された事で命名された遺跡で、初めての発見であった。吉祥山遺跡は、吉祥院裏山の台地上甗と甕(第1図)

甗とは、甕と共に用いられる煮炊用具の一つで、現在の蒸籠と同じ役割を持つ調理具である。第1図でもわかるように、底部に穴があいている。底にすのこや布等を敷き、洗った米等を入れて蓋し、水を張った甕にかける。水が沸騰してくると、蒸気が底部の穴を通して上部に噴出し、甗の中の米等が蒸される仕組みである。

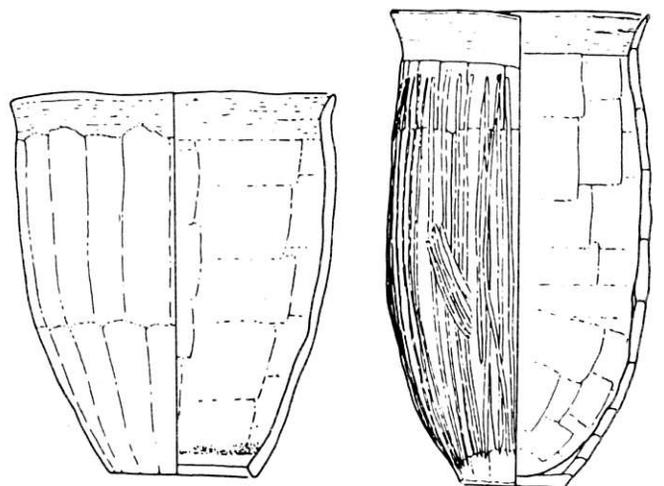
甕とは、倒卵形もしくは円筒形の胴部に広い口をもった器形を呼び、貯蔵用具や煮炊用具として用いられ、現在の貯蔵用具の中にも同種のものがある。煮炊用具としては現在の鍋や釜と同じ役割をもつ。また、甗と組んで竈にかけ、蒸すための蒸気の発生装置としても大きな役割を果たしている。

に広がる遺跡で、縄文時代晩期の遺物を出土することで早くから注目を集めた遺跡でもある。吉祥山遺跡からは、鬼高期の住居跡が4軒発見され、うち1軒は発掘調査が行われて当時の生活用具を検出した。

このことから、武蔵村山市内には幾つかの鬼高期の村が造られていたことは容易に想像できる。小学生が甗と甕を発見した場所(野山第6遺跡と命名)もその一つと思われる。この2つの土器が、今年3月末刊行の「武蔵村山市文化財資料集6」に報告されることを機会に、このコーナーで古墳時代の生活用具の一部を紹介する。



写真1 甗(左)・甕(右)



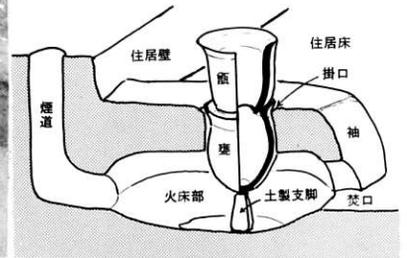
第1図 吉祥山遺跡の甗(左)と甕(右)

## 竈 (写真2、第2図)

竈は、古墳時代になってから炉が発展して作られるようになったもので、農家の土間にあった竈の原形をなす。古墳時代の住居は一般に地面を50cm～1m位掘り下げて造った方形の竪穴住居で、その壁に煙道を住居外へ掘り抜き、住居内には壁に貼り付ける形で火床部を粘土や土などで覆い、上面に甕を掛けるための掛口を穿ち、前面に焚口を穿つ。掛口には甕を掛け、土製支脚で支えている。火をつかうため脆くなるのであろうか。袖の内部に使えなくなった甕などを入れて補強材としている場合もある(第2図)。このような竈は東日本で数多く造られ、西日本では持ち運びのできる様な素焼きの置き竈が中心である。



写真2. 吉祥山遺跡の竈



第2図 竈模式図(甕と甕使用例)

## 坏と碗 (写真3)

坏は、盤や皿よりやや深く、碗より浅い器をいう。古墳時代には、赤焼けの土師器と青焼きの須恵器の坏があり、土師器坏(写真3)は須恵器坏の模倣とされている。形は底が丸く口が外反しながら立上っていて、用途は総菜などの盛り付け用と思われる。また、古墳出土の坏に貝や魚骨の入った例や平安時代の書物に酒盃としての利用が書かれているなどの例もある。



写真3 吉祥山遺跡の坏(左2つ)と碗(右2つ)

## 駒石 (写真4、第3図)

古墳時代特有の編物用の石錘と考えられているのが駒石である。吉祥山遺跡8号住居跡からも駒石と考えられる石が10個発見されている。いずれも、長さ11～15cm、重さ256～303gの長方体をした自然石を利用しており、断面は縄が結び易そうな肉厚の四角形や台形状である。第3図は、江戸時代に描かれた俵づくりの様子絵であるが、中央の紐の先に下がっている円筒状のおもりが駒石(図は木製であろう)である。



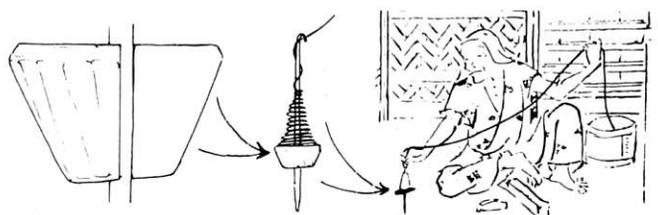
写真4 吉祥山遺跡の駒石



第3図 駒石使用例  
(紙漉重宝記)

## 紡錘車 (第4図)

糸の強度を増すために糸に撚りをかける。その道具の一つに「手すりつむ」があり、つむの回転にはずみをつける重りが紡錘車である。その紡錘車が吉祥山遺跡8号住居跡から出土している。この古墳時代の紡錘車は土製で円錐台形(第4図左)を成し、中央に穿たれた孔に糸巻棒を指し、糸巻棒の先端に糸を掛け、回転させて撚る(第4図中)。鎌倉～室町時代の絵巻物にもその使用風景(第4図右)が描かれている。



吉祥山遺跡の紡錘車  
(1/2)

手すりつむ  
模式図

手すりつむ使用例  
(石山寺縁起絵巻)

第4図 吉祥山遺跡の紡錘車とその使用例

— お知らせ —

文化財関係ビデオテープの貸出し

歴史民俗資料館では、ビデオコーナーにおいて公開している文化財関係ビデオテープ「武蔵村山市郷土史シリーズ」の貸出しを行なっています。対象は市内の

学校（小学校、中学校、養護学校、幼稚園、保育園、高等学校、大学）や市内の社会教育関係団体等です。ぜひ御利用ください。

武蔵村山市郷土史シリーズの概要

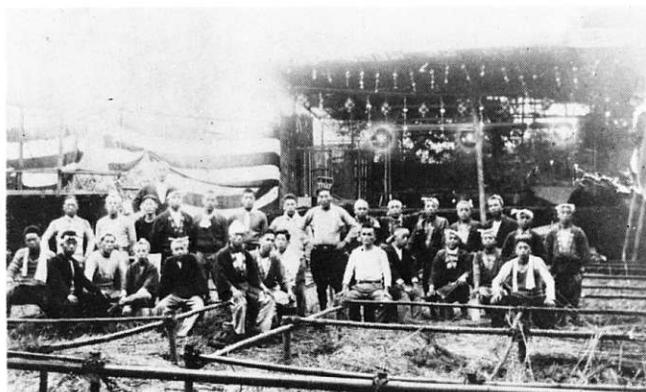
区分 番号	題 名	所要時間	内 容
No. 1	武蔵村山市の指定文化財	5分00秒	市指定文化財11件のうち、有形文化財7件を紹介。 三本榎、地頭大河内氏の墓、真福寺の梵鐘、花鳥画 他
No. 2	武蔵村山市の神社・仏閣	4分40秒	市内にある代表的な神社、仏閣7ヶ所を紹介。 真福寺、長円寺、お伊勢の森神明社、十二所神社 他
No. 3	武蔵村山市の石仏と板碑	5分00秒	市内に残る代表的な石仏8点と板碑6点を紹介。 大橋の地藏尊、六ツ指地藏、阿弥陀三尊板碑、阿弥陀一尊板碑 他
No. 4	武蔵村山市の郷土芸能	16分10秒	市の文化財に指定されている4つの郷土芸能を紹介。 横中馬獅子舞、三ツ木天王様祇園ばやし、萩赤重松ばやし、 宿薬師堂念仏鉦はり
No. 5	武蔵村山市の遺跡	8分35秒	市内にある代表的な遺跡3ヶ所を紹介。 屋敷山遺跡、赤堀遺跡、吉祥山遺跡
No. 6	武蔵村山市の手工芸	14分40秒	市内に古くから伝わる代表的な手工芸3つを紹介。 だるまづくり、羽子板づくり、御神酒の口づくり
No. 7	武蔵村山市の伝統的産業	14分00秒	市内に古くから伝わる伝統的な産業2つを紹介。 村山大島紬、狭山茶
No. 8	武蔵村山市の街道	10分10秒	市内に昔から残されている古い街道6つを紹介。 根通り、青梅街道、引又街道、江戸街道、大山道、勝楽寺への道
No. 9	武蔵村山市の自然	27分10秒	四季の様々な変化を通して、市内の自然を紹介。 雑木林、野草、公園緑地、野鳥 他
No. 10	武蔵村山市の歴史	18分30秒	先土器時代から現代まで本市のたどってきた歴史を紹介。 吉祥山遺跡、板碑、古文書、歴史的写真資料 他

— お願い —

資料提供のお願い

右の写真は、昭和8年に撮影されたもので、宿地区青年団による薬師堂境内での舞台掛けの様子です。宿地区では、薬師堂の縁日の後、歌舞伎や素人演芸がこの舞台を利用して行なわれました。このように当時は青年団活動が盛んで、武蔵村山の各地で青年団を中心とした行事がもたれていました。

歴史民俗資料館では、現在青年団関係の資料の充実を図っています。今までに収集した資料には、写真、賞状、トロフィー、団旗、印刷物等がありますが、武蔵村山の青年団の全体像を把握するには至りません。青年団関係の資料をお持ちになっている方は、ぜひ御一報ください。御寄贈いただけない資料についても一時、借用して複写させていただきます。



宿・青年団による舞台掛け

また、民具や市内の歴史を伝えるような写真をお持ちの方も御連絡ください。お願いいたします。